

花みづき

第38号 / 2024.4.1

新しい知の共有と懐かしさ

大学院 子ども学研究科研究科長
子ども学部 発達臨床学科/子ども心理学科
教授 福丸 由佳

最近流行りのAIに、大学図書館の理念と入れて検索してみた。数秒で、「社会における知識基盤として、デジタル、非デジタルを問わず、知識、情報、データへのアクセスを可能にし、(中略)教育の質保証、研究力やイノベーション力の強化を推進する教育研究活動を支え、社会における新しい知の共有や創出の実現に貢献する。」と画面上に現れた。スマホ片手に、どこにいてもさまざまな電子情報を入手できる時代だと改めて実感させられる。

近年、学術機関リポジトリ*をはじめ、オンライン上の学術情報にアクセスできるハブとしても大学図書館の役割はさらに大きくなっている。学術雑誌の電子化も増える中、国内外の最新の知見の入手が不可欠な大学院教育においてもありがたい限りである。同時に学部教育では、手軽にアクセス可能なデータをどのように読み解き、適切に利用するか、といった情報リテラシー教育の一端を大学図書館が担うことが益々期待されるだろう。

一方、コロナ禍を経て、働き方や物理的空間に対する考え方が変化する中で、大学図書館という「場」の意味も改めて問われている。蔵書の数々と静謐な雰囲気象徴される、知識や情報のインプットを中心とした学びの空間にとどまらず、ラーニング・コモンズのようなディスカッションを中心とした、学生主体の学びを創出する場の機能に重きを置く大学図書館も増えている。

そのような昨今の動向をあれこれ考えながら、久しぶりに白梅の図書館をゆっくり歩いてみた。保育、教育や福祉、心理などの専門書、さまざまなジャンルの本が並ぶ中、足を止めたのはやはり約2万冊の蔵書の1割程を占める絵本と児童書の書架だ。実習に臨むにあたり、園児達への読み聞かせに先立って多くの学生たちに利用されているらしい。これまでの先輩たちもそうやって本を借り、練習をしながら実習を経て、いろいろな現場で活躍している。そういう時間を経た絵本がたくさん並んでいるコーナーである。

同時に、その書架に懐かしさを感じたのは、自身の子育て時代にくり返し我が子に読んだ思い出の本が並んでいた



からでもある。そして気が付いた。そう、この図書館は中高の生徒や教職員、付属幼稚園の保護者の方々にも開かれていた。朝の登園後などに利用する子育て中の親御さんも少なくないらしい。さまざまな年代を対象にさらに地域とつながる大学の図書館、これは今後の大きなテーマだろう。

もちろん、主役の学生の皆さんにも大いに図書館を利用し、色々な分野の本と出会って欲しい。ページをめくりながら作者と対話しつつ、人の心の奥深さに想いを馳せたり、自身のこれからについてあれこれ考えたり…読書という営みを通してそんなぜいたくな時間をできるだけ多く持つてほしいと改めて思う。

ガラス張りの建物に、多くの電子機器を備えた最近流行りの現代的な図書館とは少々風合いが異なるが、どこか懐かしさを感じられ、ほっとできる白梅の図書館にも(入り口近くのソファコーナーにもぜひ)足を運び、豊かな学生時代を過ごしてほしいと切に願っている。

*学術機関リポジトリ：大学等の学術研究機関で生産された電子的生産物を保存・公開することを目的としたシステムで、研究成果を誰もがいつでも利用できるというオープンアクセスの考えに基づき無料で公開するもの。

▶福丸先生おすすめ図書

- 『ステップファミリーの子どもとしての私の物語』、きむらひとみ著、金剛出版、2023年
- 『NHKラジオ「みんなの子育て☆深夜便」子育ての不安が消える魔法のことば』、村上里和編、青春出版社、2024年
- 『ネガティブ・ケイパビリティ：答えの出ない事態に耐える力』、常木蓬生著、朝日新聞出版、2017年
- 『ヒューマンエラーは裁けるか』、シドニー・デッカー著；芳賀繁監訳、東京大学出版会、2009年

心に生きる絵本の魅力

絵本には、物語と合わせて絵の美しさや楽しさを堪能し、作品独自の世界観を読み、語る事ができる大きな魅力があります。そして、その魅力は、他の表現分野を通して、さらに魅力を増すこともあります。これまで、数ある絵本の中から「Readers Theater = 朗読劇」に構成できる絵本を選択し、学生たちと共に幼稚園や保育園、児童館等で活動してきました。その中で印象的だった絵本、トミー・デ・パオラ 作「さあ、歩こうよ おじいちゃん（家族三代を描いた作品）」を上演した時のエピソードをお伝えします。

一般的に朗読劇というと、一人の朗読や集団の読み手が横に並んで順番に読む、または、配役を決めて分けて読むことをイメージされるかと思います。私が行った朗読劇の手法は登場人物を演ずる役者たちは、横に並べた回転式の丸椅子に座って語りますが、場面にに応じて立ったり自由に動くこともあります。そして、左右両サイドにナレーター（読み手）がいて、物語を進行するといったスタイルの朗読劇です。役者は台本をもって演ずることもできるので、セリフを全部暗記するのではなく、手軽に上演できる手法です。舞台は、劇場でなくても園や児童館のホール、体育館等でも上演可能です。

さて、この絵本「さあ、歩こうよ おじいちゃん」のラストシーンでは、おじいちゃんが「ボビー、お前の番だよ、これからは…」というセリフがあります。（朗読劇台本集② 12「さあ 歩こうよ おじいちゃん」、トミー・デ・パオラ作；高木由貴子訳、岡田陽構成、玉川大学出版部、1996年より）当時、ナレーターを行っていた私は、観客の中におじいさんとお孫さん（5歳児ぐらいの男の子）が並んで観劇されている姿を見つけました。そのラストシー



短期大学 保育科 教授
佐藤 厚

ンになるとおじいさんはお孫さんの頭をそっと撫でておられ、お孫さんは、ボビー役のキャストをじっと見つめていました。朗読が終わるとお孫さんが、おじいさんの顔を見ていました。おじいさんの目には、涙があったのでしょうか、お孫さんはおじいさんの目をそっと手で拭いていました。その姿に胸が熱くなった私は、舞台上のキャスト達と反対側のナレーターを見るとすでにみんな涙、涙でした。役者は観客に感動を与えるのが一般的なのですが、この絵本作品は、朗読劇を通じて観客と役者を一体化させ、感動を共有させることができる、そんな力もあるのです。客席に絵本の中のおじいちゃんとお孫さんが現れ、絵本の世界が現実化されたような、そんな不思議な感動は今も忘れられません。時折一人でこの絵本を読むことがあります。最後のページを読み終えると、客席から歩み寄ってきたおじいさんの「いや～ありがとねえ」という声が今も聞こえてきます。



各教員おすすめ図書・執筆図書は図書館に所蔵しています。ぜひご利用ください。

▶佐藤先生おすすめ図書

- 『さあ 歩こうよ おじいちゃん』, トミー・デ・パオラ作・絵；高木由貴子訳, 絵本の家, 1988年
- 『おいつちにおいつちに』, トミー・デ・パオラ作; みらいなな訳, 童話屋, 2012年
- 『わすれられないおくりもの』, スーザン・バーレイ作・絵；小川仁央訳, 評論社, 1986年
- 『もこもこもこ』, 谷川俊太郎作, 元永定正絵, 文研出版, 1977年
- 『あらまっ!』, ケイト・ラム文, エイドリアン・ジョンソン絵；石津ちひろ訳, 小学館, 2004年

可能性は無限大

「独自性のある研究課題を見つけるのは難しい。君たちが考えることは大抵、他の研究者が既に探究している。だからこそ、先行研究を徹底的に調査し、新たな視点や展望を見いだすことが肝心だ」と、大学院在学中に当時の指導教員は厳しくも刺激的なアドバイスを授けてくれました。

自らが知りたいことや疑問に思うことは、ほとんどが過去に先人たちによって既に深く追求され論文や本に書き記されているというこの気づきは、私にとって新たな冒険への扉を開かせました。

若かりし頃、本を読むことに苦手意識を感じていた私にとって縁遠い存在だった図書館は、一転して魅力的な場所となり、これまでの現場実践に思いをはせつつも、朝から晩まで図書館で過ごす時期がきました。

私は大学教員になる前は、介護福祉や相談援助の実践現場で多くの経験をさせていただきました。その中でも認知症のある人を介護している家族介護者（以下、ケアラーという）と関わる機会を持たせて頂き、ケアラーの声にならない悲痛を幾度と感じ、それに十分な支援方法を見出せずにいる自身と向き合い、学び直したいと感じた事が、研究に進むきっかけとなりました。その時に出会ったのが冒頭の指導教員の言葉です。そこからは、関連法令や、認知症とは何か、認知症の予防、認知症の改善・緩和・重度化予防が可能であること、ケアラー支援など、国内外の文献をむさばるように読みマージングだらけになった文献が積み重なりました。当時はまだ、支援者でさえ「認知症になったらおしまいだ」と話す人もいた時代でしたので、クリティカルシンキングにつながり、ケアの可能性が広がるのを感じました。今では教育者として、かつての指導を引用し、自らの経験をもとに学生たちに同じ教を伝えています。

現在は、ヤングケアラーを含むケアラー支援の実践、研究、教育に関わらせて頂いていますが、ケアを必要とする人への支援は無論、子どもや家族全体の支援が必要不可欠であることを感じ、その為に必要な文献をと、気がつくとな手一杯の本を持ち白梅学園大学・短期大学の図書館のカウンターに向かっています。



子ども学部 家族・地域支援学科 准教授
午頭 潤子

そしてそれは当たり前のことではないと感謝をしています。以前、戦前に生まれた要介護高齢者から、本がいかに貴重なものであったか、図書館がありどれだけ恵まれた環境であるかといった貴重な話を聞いていました。今回、花みづきの執筆依頼を頂き、当時の思い出を振り返ることで、改めて図書館への思いを寄せています。白梅学園大学・短期大学の図書館は全国でも有数の絵本の所蔵数を誇っており、更には漫画から学術的な書籍まで多岐にわたる膨大なコレクションを有し、映画も楽しむことができる場所です。知識の宝庫であると同時に、静けさと温もりが共存する場所。煮詰まった時や一人になりたい時、論文や課題に没頭したい時、または学校に行きたくない時にも頼りになる居場所であると感じています。その静かな雰囲気と、温かく迎えてくれる職員たちは、学生や研究者たちにとって魅力的な可能性を秘めた場所です。

▶午頭先生おすすめ図書

- 『認知症世界の歩き方』、笈裕介著、ライツ社、2021年
- 『薬に頼らず認知症を治す方法』、竹内孝仁著、エクスマレッジ、2021年
- 『ヘルプマン！（イブニングKC）、ヘルプマン！！』、くさか里樹著、朝日新聞出版
- 『ヤングケアラー 介護する子どもたち』、毎日新聞取材班著、毎日新聞出版、2021年
- 『私だけ年を取っているみたいだ。ヤングケアラーの再生日記』、水谷緑著、文藝春秋、2022年

■ 主なデータベース ■（一部学外アクセス可）

- < 日本語論文 > CiNii Research、
医学中央雑誌 医中誌 Web、医学文献検索 メディカルオンライン、
- < 外国語論文 > PsycINFO、PsycARTICLES、Academic Search Elite、
Child Development&Adolescent Studies
- < 新聞 > 朝日新聞クロスサーチ、読売新聞 ヨミダス歴史館、
毎日新聞 毎案
- < 百科事典 > ジャパンナレッジ、ブリタニカオンライン、
Grove Music Online

図書館ホームページの「データベース」より、オンラインで利用できます。

古田足日 研究プロジェクト



公開そして活用

古田足日シンポジウム

参加無料 (要予約)
*本邦在住の方のみ
ご遠慮ください。

子どもの味方 子どもの見方

古田足日の仕事から考える

古田足日が亡くなって、来年で10年になります。作家として、また、評論家として児童文学に多大な足跡を残した古田は、大変な読書家でもありました。2020年、自宅に残された蔵書探検等が神奈川県近代文学館に、そして、児童書を全七蔵書約3万3千点が白梅学園に遺贈されました。以降、白梅学園大学を中心としたプロジェクトチームは、研究費の助成も受け蔵書資料の整理と研究を進めています。遺贈資料から改めて見えてくるのは、古田足日が「子ども」を思想の根本に据えていたこと、そして、常に子どもを見る目を問い続けていたということです。子どもの味方でありたいと思っいる方々、子どもの見方を磨きたいと思っている方々の多くのご参加をお待ちしております。

報告 「古田足日研究プロジェクトの“これまで”と“これから”」
—— 仲本美央 (白梅学園大学子ども学部・向大学院子ども学研究科教授)

「古田足日と国語教科書」
—— 鬼頭七美 (白梅学園大学子ども学部准教授)

「古田足日が生きていたら、ウクライナ情勢をどう語っていたらう」
—— 西山利佳 (青山学院大学コミュニティ人間科学部准教授)

「〈方法化された誠実〉を追って」
—— 藤田のぼる (児童文学評論家・作家、日本児童文学者協会理事長)

コメンテーター 宮川健郎 (大阪府立児童文学振興財団理事長、武蔵野大学名誉教授、(公財)神奈川県文学振興会評議員)
司会 佐藤宗子 (千葉大学名誉教授、(公財)神奈川県文学振興会理事)

日時 | 2023年11月25日(土) 13時30分開始 (13時開場)
*終了は16時ころを予定しています。

会場 | 神奈川県近代文学館 (〒220-0204 横浜市中央区山手町110) (TEL.045-622-6666)
展示館 2階ホール (定員220名・全席自由)

申込み方法は裏面をご覧ください。

主催：白梅学園大学・白梅学園短期大学子ども学研究科 古田足日研究プロジェクト (JSPS 科研費 JP201026233) 共催：神奈川県近代文学館、(公財)神奈川県文学振興会

シンポジウムの実施

2023年11月25日(土)、神奈川県近代文学館にて「古田足日シンポジウム 子どもの味方・子どもの見方 古田足日の仕事から考える」が開催されました。

(主催：白梅学園大学・白梅学園短期大学子ども学研究所 古田足日研究プロジェクト、共催：県立神奈川県近代文学館、(公財)神奈川県文学振興会)

当日は、本学へ寄贈された児童書を含む蔵書約3万3千点にもおよぶ資料の整理と研究についての「古田足日研究プロジェクトの“これまで”と“これから”」や、「古田足日と国語教科書」、「古田足日が生きていたら、ウクライナ情勢をどう語っていたらう」、「〈方法化された誠実〉を追って」が登壇者より報告があり、来場者との熱心な情報交流・意見交換が繰り広げられました。

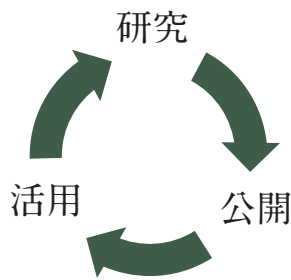
本プロジェクトに対する社会的な期待の声もいただき、今後ますます発展的な研究活動に取り組んでいきたいと思っています。

(古田足日研究プロジェクト)





「絵本ナビより」



(図書館×子ども学研究所共同)

2014年6月に亡くなった
古田 足日氏について
1927年愛媛県生まれ。
早稲田大学露文科中退。児童文学作家・評論家。

主な作品
「おしいれのぼうけん」、「ダンプえんちょう やっつけた」(いずれも童心社)、「ロボット・カミイ」(福音館書店)、「モグラ原っぱのなかまたち」(あかね書房)、「新版宿題ひきうけ株式会社」、評論「児童文学の旗」(いずれも理論社)、最新刊に評論「現代児童文学を問い続けて」(くろしお出版)など多数

2023-2024

に向けた一歩を

図書館での貸出開始

2024年4月から「古田家寄贈書」として、古田足日氏の蔵書の一部を図書館にて利用提供いたします。館内閲覧はもちろんのこと、館外貸出も可能です。

1階閲覧室に【古田足日氏コーナー】できました



館外貸出は、通常利用の貸出冊数の範囲内で、同じ貸出期間での利用が可能です。

図書館(受入)チームのこれまで

古田家にあった約33,000冊のうち、主に1階の書庫にあった児童書を中心に、図書館チームでは受入作業を進めてきました。第一段階では、古田氏の付箋、書き込み等のある貴重な研究対象本がまぎれていないかを確認する仕分け作業を行いました。コロナ禍の学生支援の一環として雇用した学生アルバイトの皆さんが1冊1冊丁寧に仕分けした結果、9,000冊ほどの研究対象本を確認することができました。これらは文献調査チームへ提供し、残りのおよそ14,000冊について、第二段階のリスト化を進めました。

2023年夏、リスト化作業が完了し、いよいよ図書館の蔵書として受け入れを開始しました。所蔵公開するためのシステム入力、資料を活用・貸出可能にするための整備を整え、配架する書棚、スペースを準備して、登録作業を進めています。

そして2024年4月より、ごく一部ではありますが、寄贈いただいた児童書の図書館利用を開始します。「子どもについて関心をもって勉強している学生さんたちに使ってほしい」という、ご令室文恵氏の篤志に応え、学生利用者をはじめとする多くの方々に手に取ってほしいと思っています。

ぜひ、ご利用をお待ちしています。



私の薦めるこの1冊

小野寺拓也・田野大輔『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』(2023年) 岩波ブックレット

本書はブックレットなので約120ページと「ちょっと読んでみようかな」と思って手に取りやすいボリュームですが、それでいて内容は必要なエッセンスが詰め込まれた良書だと思います。なお本書は2023年にAmazonで最も売れた歴史書のひとつです。

本書は「はじめに」の中でSNS等で「ナチスは良いこともした」という議論が定期的に繰り返されていることを指摘します。「ナチスは良いこともした」とされる一例として、ナチスの家族支援策を取り上げています。結婚したばかりのカップルに結婚資金を貸付け、子どもを1人産むごとに4分の1は返済不要としたり、母親学校や母親相談所を設置して物心両面において母親を支援していたということです。しかしながら、ナチスが当時強く求めていたのが「男性が外で働き、女性は家庭内で家事や子育てに専念する」という「伝統的」家族観への復帰でした。そして女性が家族という「小さな世界」を作り、それが男性の「大きな世界」を支えることで成り立つものであり、女性は本来の「使命」へと立ち返って政治や職業についての責任は喜んで男性に委ねるべきだとヒトラーは考えていたということです。また「国民」として想定されていたのはあくまで①ナチ党にとって政治的に信頼でき、②「人種的」に問題がなく、③「遺伝的に健康」で、④「反社会的」でもない人々だけでした。

ナチスの家族支援の背景にはそうした家族観や国民観があること考えると、ナチスの家族支援は「手厚い」と言えるのでしょうか？

こうした「ナチスは良いこともした」という議論と同様のことは日本でも見られます。例えば2018年10月2日に当時の文部科学大臣・教育再生担当大臣の柴山昌彦(自



子ども学部 子ども学科 准教授
安倍 大輔

民党)が、定例記者会見で「教育勅語が『同胞を大切にする』『国際的な協調を重んじる』と書いていて、現代風に解釈をしたりアレンジをした形で道徳等に使うことができるか検討に値するのではないか」と述べています。

日本史の授業で学んだように、天皇主権を謳った大日本帝国憲法下で制定された教育勅語は「基本的人権を損い」「国際信義に対して疑点を残す」と批判され、1948年6月19日に衆議院本会議で全会一致で排除決議が採択されています。

現在の日本国憲法で定められている「国民主権」や「基本的人権の尊重」とは相反する価値観を持つ「教育勅語」について、「教育勅語にも良いことが書いてある」と文科大臣が発言することは決して看過されるべきことではないでしょう。

このように本書はナチスの事例を取り上げながら、歴史上のある1点に着目してその是非を判断するのではなく、歴史という時間の流れ(横軸)と政治や経済といった社会の構造(縦軸)の交点で捉えることの重要性を教えてくれていると思います。

▶安倍先生おすすめ図書

- 『歴史/修正主義』, 高橋哲哉著, 岩波書店, 2001年
- 『カール・マルクス「資本論」(NHK100分de名著)』, 斎藤幸平著, NHK出版, 2021年
- 『「推し」の科学 プロジェクション・サイエンスとは何か』, 久保(川合)南海子著, 集英社, 2022年
- 『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』, 小野寺拓也, 田野大輔著, 岩波書店, 2023年



岩波ブックレットや読みやすい新書も多数、揃えています。

2022 白梅サバティカル編『地球の歩き方』

—カナダからイギリス・ドイツ・EU・ニュージーランドまで—

私は2022年度一年間、サバティカル（長期研修休暇）の機会をいただきました。貴重な機会をいただきましたことに感謝します。2022年4月上旬、コロナ禍まっただ中に成田空港を飛び出して、カナダ・バンクーバーに向かい、地球各国を一回りして、2023年3月31日夜にニュージーランド・オークランドから羽田空港に帰国。かねてから共同研究を進めてきた世界各国の研究者の大学等に出向き、対面で研究検討を行うことができました。まさに、身も心も十分に満喫することができた1年間でした。

海外旅行と言えば、私が「若者」だったころのバイブルは何といっても「地球の歩き方—世界各国編」（ダイヤモンド・ビッグ社）です。出入国の仕方から街中の穴場まで徹底的な取材に基づく情報満載で、海外調査に出向くときはイギリス編やアメリカ編と必ず購入し、現地の滞在方法や美味しいレストラン情報までをチェックして出かけたものです。過去にお世話になった約30冊はまだ本棚に並んでいます。

さて、1年間どんな世界を見てきたか。4月のカナダのバンクーバーでは、風光明媚な港に面したお洒落なアパートメントに3か月滞在し、大学での研究の合間に街中をたびたび散歩しました。バンクーバーのダウンタウンには有名な観光地が多く集まっていますが、そのすぐ近くには薬物中毒のホームレスが溢れているエリアもあります。「観光客は危険」とガイドブックに書かれていますが、同僚と一緒に注意深く、路上に溢れる人・人・人のすぐそばを歩きリアルな実情を目の当たりにしました。現地大学の知人はこうした人たちの居住支援をしていましたので、カナダの薬物の黒い歴史や政府の責任性などディープな話や、私たちが何ができるか、ビール片手に夜遅くまで話し込みました。



またある日は、バンクーバー美術館前の広場で賑やかなデモに合いました。エッセンシャルワーカーたちが劣悪な待遇への抗議をしていたのです（写真）。「私は病院の心理士、介護士。あなたの国も同じ？ぜひ私たちの訴えを日本にも伝えて！」と意気投合しました。

カナダはまた、世界でもいち早くLGBTQの権利を認めた国で、街中には、虹色があちこちに掲げられているレインボー通りがあります。プライド・パレードという世界的に有名な「2SLGBTQAI+という生き方を肯定してま〜す」を歩きながら表明するお祭りがある通りです。レインボー通りだけでなく、街中で普通にLGBTQの人たちが買い物袋を手に笑顔で堂々と手をつないでいる風景によく出会います。これが世界の普通なんだと実感しました。

7月からはイギリスのロンドンとカンタベリーに滞在しました。あの有名なカンタベリー大聖堂がある町です。「障害のある人の司法への公正なアクセス権の保障」がテーマの国際会議（Fair Access to Justice Institute）があり、世界20か国からフェロー（私は日本ハブの代表）が参集しました（写真）。南アフリカのレトからは



《ドイツ・ハイデルベルク大学心理学部ポウエン教授と》

子ども学部 子ども学科／教育学科 教授
堀江 まゆみ



《イギリス・カンタベリー 司法へのアクセス国際会議にて》

全盲の弁護士が参加したり、メキシコのメンバーたちはいつも陽気に踊るように議論していたりと、各国さまざまな人たち。2024年の今も、このメンバーでの国際ミーティングをリアルタイムのオンラインで継続しています。

さて、まだまだ続きます。イギリスのあとはドイツのハイデルベルクに移動し、ハイデルベルク大学心理学部のポウエン教授（写真）と今後の研究の打ち合わせをし、次の研究計画が決まりました。ドイツが終わると次は、高速バスでスイスの山越えをして、イタリアのミラノからニースに寄り、ちょっと地中海で海水浴をして、鉄道でパリへ。EUはパスポートがいらないから隣町に行く感覚です。

サバティカル1年間の後半も、最後のニュージーランドのオークランドとウィリントンまで続きます。

ネット時代の今どきはGoogleマップとGoogle翻訳があれば、ドイツ語でもフランス語でも電車をセレクトして自動販売機で切符を買えますから、便利なことこの上ないです。それでも重いのはわかっているながら、今回も「地球の歩き方—世界各国編」数冊を鞆に入れていきました。行った先々を赤マジックで◎するのが楽しみで仕方がない！。

▶堀江先生おすすめ図書

- 『地球の歩き方—世界各国編』, Gakken

図書館おすすめスポット

■ソファ席ができました！



図書館1階に、ソファを設置しました。

■図書館スタッフがおすすめする本コーナー（1階）

図書館スタッフが、在学生のみなさんにぜひ読んでほしい本を取りそろえています。

小説やルポルタージュ、エッセイなどの現代社会に関係するテーマや、日々の勉強に関係するものなど、様々なジャンルが並んでいます。一見、関係ないように思えるタイトルでも実は役に立つこともあります。図書館1階の閲覧席横にありますので、ぜひ手にとって知識・興味関心を深めてみてください。



設置場所は、入口から左に曲がりカウンターの前左手、検索端末の奥になります。くつろぎの空間としても図書館をご利用ください。

■小学校教科書、学年別絵本、教員養成推薦書コーナー（1階）

図書館の1階階段横にコーナーがあります。各小学校で採択している国語・算数・理科・社会・道徳等の教科書と、各教科の指導要領が並んでいます。

また、先生方が推薦した小学校教諭になるために読んでおきたい本も隣にあります。貸出（1週間）もできますので、小学校教諭を目指す方はぜひこのコーナーに足をはこんでください。



図書（絵本） 貸出ベスト10

(2023/1/1～2023/12/31)



順位	回数	書名
1位	24回	跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること
2位	21回	育ちつづける人達 障害の現実と普通の生活のはざままで
3位	18回	たんぼぼのうたがきこえる
4位	17回	施設で育った子どもたちの語り
5位	12回	どうぞのいす
5位	12回	このまちで生きる 障害のある仲間たちの現在（いま）を未来に向けて紡ぎ続けたあさ作業所30年のあゆみ
7位	11回	パンどろぼう
7位	11回	発達障害のある子があなたにわかってほしい ホントの気持ち 幼児期の子どもの「困った行動」にとまどわないヒント
7位	11回	施設で育った子どもたちの居場所 「日向ぼっこ」と社会的養護
10位	10回	おばけのてんぷら
10位	10回	家族と暮らせない子どもたち 児童福祉施設からの再出発

2023年も保育・施設実習などに関する図書や絵本が上位に。絵本では、「パンどろぼう」が新たにランクイン。「どうぞのいす」「おばけのてんぷら」も根強い人気です。読みたい本が見当たらなければリクエストも受付しています。

DVD（ビデオ） 閲覧ベスト10

(2023/1/1～2023/12/31)



順位	回数	作品名
1位	27回	Aladdin
2位	16回	リメンバー・ミー
3位	14回	すずめの戸締まり
4位	13回	ズートピア
5位	12回	貞子
6位	11回	胸が鳴るのは君のせい
7位	10回	美女と野獣 Beauty and the Beast
7位	10回	ベイマックス
8位	9回	シング Sing
9位	8回	アナと雪の女王 2
9位	8回	Wonder ワンダー 君は太陽
9位	8回	MEG ザ・モンスター The Meg

アニメ・邦画・洋画問わず新規購入したタイトルの中から「すずめの戸締まり」がランクインしました。ディズニー作品も多くランクイン。ご利用の場合は、検索端末近くにあるファイルより希望タイトル番号（HPからも検索可）をカウンターに伝え、学生証をお出しくください。

花みづぎ・図書館についてのご意見・ご感想を図書館までお寄せください。E-mail : library@shiraume.ac.jp

図書館のホームページはこちらから <http://libwww.shiraume.ac.jp/>

